

日本最初の女医

# 荻野吟子

不屈の精神と大いなる愛



人その友の為に

己の命をすつる

之より大いなる愛はなし

(ヨハネ伝第十五章十三節)

荻野吟子が愛唱した聖句



# 荻野吟子年譜

※年齢は満年齢

嘉永4年(1851) 3月3日、幡羅郡俵瀬村(現熊谷市)に生まれる。

慶応4年(1868) 埼玉郡上川上村(現熊谷市)の名主・稲村貫一郎と結婚。

明治3年(1870) 病気で協議離婚(19歳)、大学東校附属病院に約2年間入院。女医を目指す契機となる。退院後、寺門静軒の「両宜塾」を継承した松本万年に師事。

明治6年(1873) 上京。国学者・井上頼圀の神習舎に入門(22歳)。

明治7年(1874) 内藤満寿子の甲府女学塾に助教として招かれ、甲府に赴く(23歳)。

明治8年(1875) 女子高等師範学校に入学(24歳)、12年7月同校を卒業(28歳)。

明治12年(1879) 私立医学校の好寿院に入学、15年優秀な成績で卒業(31歳)。

明治15年(1882) 東京府に医術開業試験の願書を提出したが却下。翌年、東京都・埼玉県に提出したが却下。内務省に請願書を提出するが却下。

明治17年(1884) 医術開業受験が許可され、9月前期試験に合格。翌年3月後期試験にも合格、女医第1号となる(34歳)。5月本郷湯島(現文京区)に医院開業し、後に下谷(現台東区)に移る。

明治19年(1886) この頃、本郷教会にて洗礼を受け、東京婦人矯風会に参加(35歳)、後に風俗部長となる。

明治20年(1887) 大日本婦人衛生会を設立。翌々年、明治女学校教師・校医となる。

明治23年(1890) 議会の婦人傍聴禁止撤回運動に参画。11月熊本県の志方之善と結婚する(39歳)。

明治27年(1894) 北海道のインマヌエル(現今金町神丘)に入植、夫とともにキリスト教による理想郷建設を目指す。

明治29年(1896) 夫及び夫の姉の子トミと国縫に転居。翌年、トミを養女とする。

明治30年(1897) 瀬棚村(現せたな町)に移り、医院開業。この頃、淑徳婦人会や日曜学校を創設。

明治37年(1904) 大病にて熊谷の姉友子のもとで療養(53歳)

明治38年(1905) 一度回復し在京するも再び大病、7月瀬棚に戻る。9月之善が死去。

明治41年(1908) 帰京し、本所区新小梅町(現墨田区)に開業(57歳)

大正2年(1913) 6月23日死去(62歳)、本郷教会(文京区)にて葬儀、墓地は雑司ヶ谷霊園(豊島区)



明治時代初期の生誕地周辺地域  
 (『第一軍管区地方2万分1迅速測図原図』に加筆)



## 誕生

吟子は、嘉永4年(1851)3月3日、幡羅郡<sup>はたらぐん</sup>依瀬村(現熊谷市依瀬)の名主、萩野<sup>あやざぶろう</sup>綾三郎・嘉与の五女「ぎん」として生まれました。萩野家は、依瀬村の名主として村運営の中心を担った家で、長屋門を構えた豪壮な家でした。この依瀬村は、北に流れる利根川には堤がなく、南には中条堤がそびえ、利根川の増水のたびに水が滞留しがちな「水場」の村でした。

吟子は、幼いころから聡明で、勉強好きであったといわれています。依瀬村の隣、葛和田村(現熊谷市葛和田)の大龍寺には、北条察源が行余書院という寺子屋を開設しており、吟子が学んだ可能性があります。



生家の長屋門(現在、群馬県千代田町光恩寺に移築)

## 最初の結婚

慶応4年(1868)、吟子が17歳になる年に、埼玉郡上川上村(現熊谷市上川上)の名主稲村家の長男、貫一郎に嫁ぐことになりました。

稲村家は、古河藩領であった上川上村の運営を担った家で、この地域では有数の豪農でした。吟子が嫁いだ当時、古河藩士を父に持ち、日本を代表する女流南画家・奥原晴湖が、戊辰戦争の難を逃れるため、稲村家に仮寓していました。晴湖との出会いは、吟子の人生に大きな影響を与えたようで、吟子は上京時に、晴湖のように男装したとも伝えられます。

貫一郎は、熊谷のために多くの功績を挙げた人物です。少年の頃、古河藩に遊学し、若くして名主役を務めています。明治8年(1875)に結成された埼玉県初の政治的社交団体「七名社」の構成メンバーとなり、明治17年(1884)には、埼玉県会副議長を務めています。銀行の創設・経営や牧畜牛乳販売の開業など、実業家としても大成しています。また、地元の農家のために、「やなぎごおり」の普及にも励みました。

吟子と貫一郎の結婚は、長くは続きませんでした。吟子が病気にかかり、実家で療養を余儀なくされたのです。そして、明治3年(1870)、協議離婚となりました。貫一郎は、その後も吟子への援助を続けたといわれています。



奥原晴湖



稲村貫一郎

## 入院と女医への決意



大学東校の後身帝国大学(現東京大学)医学部

吟子は、大学東校(後の東京大学医学部)の附属病院に入院することになりました。生死をさまようほどの病状となり、約2年間の入院を余儀なくされました。

やや回復し、同じ女性患者を励ます際、男性の医師に診察される経験に羞恥と屈辱を覚えることに共感し、これが嫌で受診せず、命を落とす女性さえいることを嘆きます。女医の必要性を痛感し、吟子自身が女医となる決意をしたのでした。



## 妻沼両宜塾に入門

故郷に戻った吟子は、本格的に学問を始めます。まず、幕末の著名な儒学者・寺門静軒が妻沼村(現熊谷市妻沼)において開塾した両宜塾に入門します。吟子は、静軒の後を継いだ松本万年の教えを受けました。

松本万年は、静軒に漢学を学び、医業も修めました。また、吟子をはじめ、深谷宿(現深谷市)出身の公許女医2号・生沢クノなどの師であり、女子教育に力を注いだ人物でした。両宜塾では万年の長女荻江も教えていましたが、吟子と荻江は深く親交を結び、義姉妹の契りを交わしたと伝えられます。



両宜塾(現在せず、跡地に記念碑が立つ)

## 女子教育の道へ

明治6年(1873)に父綾三郎が亡くなると、さらに学問を修めるため22歳で上京します。

まず、国学者であり、かつ皇漢医である井上頼圀の私塾神習舎に入ります。頼圀は、後に国学の大家となる人物です。吟子の和歌の力は師も越えると称されるほどに、高い教養を身につけています。

その翌年には、甲府に女性私塾の設立を目指していた内藤満寿子の求めにより、助教として、同じく井上門下であった年下の田中かく子とともに甲府に赴きますが、満寿子が病気となったため休校となり、吟子は再び東京に戻ります。

この後も、松本荻江や井上頼圀、内藤満寿子、田中かく子とは、生涯を通じて長くつきあいが続きます。愛唱していた聖句(表紙参照)を体現するように、師や友をはじめ周囲の人々をたいへん大切にしました。そして、多くの人が吟子を助けました。



内藤満寿子(『明治名婦百首』より)



井上 頼圀(『続己亥叢説』より)

## 女子高等師範学校で学ぶ

この頃、初めて女性の教員養成を目的とした学校である女子高等師範学校(現お茶の水女子大学)が設立されます。吟子は、この学校で学ぶことを選び、第1期生として合格します。このとき、松本荻江は、この学校の訓導(教授)を勤めていました。

明治8年(1875)11月、皇后を迎えて開校式が行われ、第1回生74名の学校生活が始まりました。教科内容は、地理・歴史・物理・化学・数学・博物学・経済学・教育論・簿記法・養生法・唱歌・体操等多岐にわたっていました。吟子の成績は優秀で、寄宿舎の寮長を務めたといえます。

この学校を卒業するのは難しく、第1回入学者74名のうち、第1回目の試験で卒業できたのは15名でした。吟子は、おそらく病で帰郷せざるを得ず、試験を受けることができませんでした。半年後の明治12年(1879)7月10日、28歳の吟子は、第2回目の試験で卒業しています。このとき卒業できたのは、わずか18名でした。





女子高等師範学校第2回卒業生(上段左端が吟子)

第廿三番	第廿二番	第廿一番	第廿番	第廿九番	第廿八番	第廿七番	第廿六番	第廿五番	第廿四番	第廿三番	第廿二番	第廿一番	第廿番	第十九番	第十八番	第十七番	第十六番	第十五番	第十四番	第十三番	第十二番	第十一番	第十番	第九番	第八番	第七番	第六番	第五番	第四番	第三番	第二番	第一番	
明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石	明石

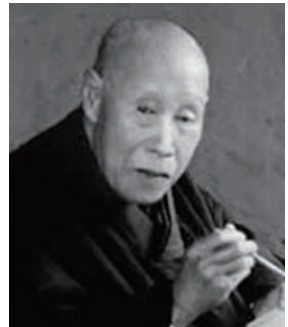
女子高等師範学校第2回卒業生名簿

## 医術を学ぶ

卒業にあたって、女子高等師範学校幹事の永井久一郎教授との面談の際、吟子は女医を目指していることを明らかにします。永井は医学校への女子の入学が難しいことを知っていましたが、彼女の意志が固いことをみて、後に陸軍軍医総監や赤十字社長となる医学界の重鎮石黒忠恵を紹介しました。吟子は、自分の考えをまとめたものを携えて、石黒と面会します。石黒は吟子のために尽力し、知人の宮内省侍医・高階経徳が経営している医学校好寿院への入学が許可されました。

当時、吟子のほかに5～6人の女性が通っていたとのことですが、吟子のほかは辞めてしまいました。吟子は、この学校に通いながら、豪商高島嘉右衛門や海軍兵学校教官、農商務省書記官家の家庭教師や教育顧問も勤めています。これらの家庭と学校までは1里(約4km)近くもありましたが、吟子は学業のかたわら通い続けました。こうして3年間の修学を終え、明治15年(1882)、優秀な成績で好寿院を卒業しました。

しかし、卒業後が正念場でした。当時の医師制度の下では、私立の医学校卒業生は、政府の行う医術開業試験に合格しなければ、正規の医師となることができなかつたのです。対して、官公立医学校を卒業した者や外国の医学校を卒業した者は、その卒業証書を提出して請願すれば認可が下りるという制度でした。特に、今まで女性で医術開業試験を受けることができた者は皆無でした。これから鉄の扉を開けるべく吟子の果敢な挑戦が始まるのでした。



石黒忠恵

## 不屈の請願

吟子は明治15年(1882)6月、東京府に医術開業試験の願書を提出しましたが、8月に却下されました。翌16年、再び願書を提出しますがこれも却下、9月に今度は埼玉県に提出しますが却下、内務省にも提出しますが、これも却下されたのです。こうした苦境の中でも吟子はあきらめず、各地の医師の助手について実地の腕も磨いていましたが、日本で受け入れられなければ海外に行くことを考えていたほど、進退は窮まっていたのです。



高島嘉右衛門  
『吞象高島嘉右衛門翁伝』より

吟子は、石黒忠恵のもとを訪れ、助けを求めます。石黒は、内務省衛生局長の長与尊斎に面会して状況を伝えました。当時、衛生局が医師制度を策定していました。石黒は、「女が医者になってはいけない」という条文がない以上は、受けさせて及第すれば開業させるべきではないかとかけあいました。高島嘉右衛門も吟子を助けます。長与と会うための紹介状を吟子に渡しますが、このとき、井上頼圀に頼んで、日本の古代にも女医がいた文献(『令義解』)があることを資料にし、紹介状に添えたともいわれています。

吟子はついに長与と会いますが、長与は、医学を修得しているのだから受験を許可してもよいとの考えでした。ようやく、女性の受験が認められたのでした。



## 女医への遠い道

吟子が医師を目指していた当時、多くの女性が同じように医師を目指していました。女医第2号の生沢クノをはじめ、多くの女性が医術開業試験を受験すべく活動を行っていました。吟子が願書を提出する以前、明治11年(1878)には東京府から、14年(1881)には長崎県から、内務省に女性の受験についての問い合わせが行われています。

こうした活動の中で、吟子は重要な役割を果たしたと考えられます。まず、吟子はすでに医学校の好寿院を卒業しており、たしかな医学を身につけていました。

また、これまでの人生で培った文化人としての豊かな教養と人脈は、大きな力となりました。吟子には、石黒忠恵や高島嘉右衛門ら当時の大物との繋がりがあり、これらの人脈を活かして衛生局長の長与専斎に直接会うことにも成功しています。

しかし、後に生沢クノが語っているように、女医への道は、吟子だけでなく、多くの女性たちの努力によって切り拓かれたものだったのです。



生沢クノ(深谷市提供)

## 日本最初の女医の誕生

吟子をはじめとして、女医を目指す女性たちやその周辺の人々の尽力により、明治17年(1884)の内務省医術開業試験では、女性からの願書がついに受理されました。

この試験は前期と後期とがあり、9月3日に行われた前期試験の女性の受験者は、荻野吟子・木村秀子・松浦さと子・岡田みす子の4人でした。試験科目は、物理学・化学・生理学・解剖学です。吟子は、すでに女子高等師範学校で学び、さらに好寿院で本格的な医学を学んでいました。これに加えて、必死に受験勉強をしていたことにより、女性で唯一の合格を勝ち取りました。

次いで、後期試験が翌18年3月(1885)に行われました。内科学・外科学・産科学・眼科学・薬物学・臨



当時の熊谷駅

床実験の専門科目でしたが、周囲の注目が集まる中でこれにも合格、医籍登録され、ここに日本最初の公認された女医、荻野吟子が誕生したのです。吟子はこの時、34歳でした。この後期試験は、132人が受験して、合格者はわずか24人という非常に厳しいものでした。

しかし、後期試験に合格したそのすぐ後に、吟子は母危篤の通知を受け、故郷依瀬に駆けつけました。そして、母の死と向き合いました。この2年前には高崎線が開通しており、これに乗って故郷に帰ったのでしよう。

## 荻野医院の開設

吟子に、悲しみにくれている時間はありませんでした。母を亡くしたその翌月には、本郷三組町(現文京区)に「産婦人科 荻野医院」の看板を掲げました。新聞・雑誌は、この日本最初の女医の誕生を報道しました。患者は日に日に増えて、やがて下谷西黒門町(現台東区)の2階建ての大きな家に移りました。それでも大盛況でした。

この荻野医院には、若い女医の卵をはじめ多くの女性が寄宿していました。女子教育に奔走していた松本荻江も一時寄宿しています。



## 鹿鳴館スタイルの写真

最もよく使われる吟子の写真は、このパンフレットの表紙(後世に写真に色を塗ったもの)にもなっているものですが、熊谷の小暮写真館で撮影されたもので、当時流行していた鹿鳴館スタイルの服装です。医師になってまもない頃の吟子を撮ったものでしょう。

鹿鳴館は、明治16年(1883)、政府の条約改正のための欧化政策により、東京・日比谷に造られた社交場です。夜会服にボンネット(帽子)が当時の流行スタイルでした。吟子もこれを取り入れました。ここに、現在でも多くの人が親しんでいる吟子像ができあがりました。



モダンスタイルが見える当時の東京



熊谷で撮影された鹿鳴館スタイルの写真

## キリスト教入信と社会運動

この頃、吟子は、本郷教会で海老名弾正牧師から洗礼を受けました。吟子は熱心なキリスト教信者となっ  
ていきますが、このことが人生に大きく影響を与えました。明治19年(1886)には、当時の女性社会運動の  
中心であった東京婦人矯風会(後の日本キリスト教婦人矯風会)に入会し、その後、風俗部長となりました。  
特に廃娼運動に熱心に取り組み、大演説会を開催しています。

このほかにも、吟子は女性の権利を向上させるため、先頭に立って活動を行っていました。

明治20年(1887)には、大日本婦人衛生会を設立しています。これは、日常家庭の女性の役割を積極的に  
位置づけることを目的とし、衣・食・住や育児など様々な分野での啓発活動を行っています。明治23年  
(1890)には、衆議院の婦人傍聴禁止の撤回運動に参画し、撤回を勝ち取っています。  
また、女子教育に大きく影響を与えた巖本善治の招きで明治女学校の生理・衛生の講  
師ならびに校医になっています。

さらに、当時、女医の必要性についての議論が盛んに行われていましたが、明治25  
年(1892)に論文を発表し、女医の必要性、ならびに大学の女子への門戸開放と医学部  
を備えた女子大学の設立を訴えています。

明治24年(1891)に起きた岐阜県を震源とする濃尾大地震では、女子の孤児を保護す  
るために立ち上がった石井亮一(日本の知的障害児教育の創始者)に賛同し、荻野医院  
を子供たちのために開放、自らも孤児たちの世話を行いました。



石井亮一(滝乃川学園提供)

## 第2の結婚

明治23年(1890)、同志社出身のキリスト教伝導に燃える1人の青年、志方  
之善が荻野医院を訪れます。2人は意気投合し、結婚することを決意します。  
公許女医第1号で社会的にも活躍する吟子と、一介の青年でしかない15歳年  
下の之善との結婚を周囲はこぞって大反対しました。しかし、2人の決意は  
固く、その年の11月25日、之善の故郷、熊本県山鹿郡来民町(現山鹿市)の  
生家で結婚式が行われました。このとき、吟子39歳、之善26歳でした。

之善には、キリスト教徒による理想郷を建設するという夢がありました。  
吟子もこの夢に大きく共感し、行動をともにすることになります。行動力



同志社の学友と共に  
(中央後方が志方)



に優れる之善は、翌年5月には吟子を東京に残して北海道に渡り、衆議院議員・犬養毅らが権利を持っていた国有未開地のうち、瀬棚郡利別原野の200町歩の貸付地を得ます。そして、キリスト教徒の同志たちと、理想郷を建設するために未開地の開拓を始めます。

一方、吟子自身は、明治女学校の舎監となり、居を学校内に移しました。荻野医院は、石井亮一に提供しています。石井は、孤児たちの施設「聖三一孤女学院」を創設しました。

## 北海道へ渡る

之善らの開拓事業は、未開の荒野を一から開墾する非常に過酷なものでした。彼らは、この地を新約聖書中の「神と共にいる」という意味のインマヌエル(現今金町神丘)と名付け、仲間を集めました。之善が属する組合派の信徒だけではなく、明治26年(1893)には、長井村田島(現熊谷市田島)の信徒天沼恒三郎ら聖公会の一行が入植しています。

明治27年(1894)、吟子も北海道に渡り、インマヌエルに入ります。明治女学校時代の同僚の手記によれば、吟子がこの開拓事業にたいへんな情熱を持っていたことがうかがえます。インマヌエルでは、之善の姉の夫が亡くなったため、その子トミを預かり、やがて養子にしています。

しかし、明治29年(1896)、之善と吟子は、インマヌエルを撤退して国縫(現山越郡長万部町)に向かいます。インマヌエルの開拓は、それなりに軌道に乗っていましたが、協会派と組合派の対立に加え、成功地以外の貸付地の返還を命じられたことからキリスト教徒以外の入植者も入るようになり、理想郷建設が目的の之善には困難な状況になっていました。吟子は、国縫で医院を開業していたとも伝わります。



瀬棚淑徳婦人会の会員(後列右端が吟子)

明治30年(1897)には、ニシン漁で賑わう瀬棚村(現せたな町)に移りました。村内の会津町に家を借り、婦人科・小児科医院を開業しました。瀬棚では、町の有力者の妻たちと淑徳婦人会を結成して社会活動を行っていました。さらに、日曜学校を創設、信仰の普及に努めました。



開業の地跡  
(せたな町)

## 夫 之善の死

明治36年(1903)、之善は、京都の同志社に再入学するため北海道を離れました。吟子は、札幌での開業も目指していたようですが、実現したかは分かりません。明治37年(1904)、大病を患い、熊谷の姉友子のもとで療養しています。一時回復するものの再び病に伏せます。明治38年(1905)、伝導のため之善が北海道に戻り、さらに瀬棚に帰ると、吟子も無理を押して瀬棚に戻ります。しかし、今度は、志方が病を患い、同年9月23日、会津町の自宅で亡くなりました。享年41歳、吟子が54歳のときでした。之善の墓は、インマヌエルに建てられました。



瀬棚・インマヌエル周辺地図

## 吟子の上京と死

吟子は、夫が眠る北海道にその後3年留まりましたが、姉友子の勧めにより、明治41年(1908)に再び東京に戻りました。本所区新小梅町(現墨田区)にて医院を経営し、9つ年上の姉友子と養女トミと暮らし



した。医院はあまりはやらなかったようですが、多くの親戚や友人に囲まれて穏やかな日々を送りました。

大正2年(1913)3月、吟子は卒倒し、そのまま病床に伏せました。その後、5月に脳卒中で倒れ、ついに回復せず、6月23日、友子やトミ、親戚に看取られて波乱多き一生を閉じました。62歳でした。葬儀は、2日後の25日、本郷教会で行われ、親戚・友人や吟子を尊敬する若き女医たちから50~60名が見送りました。墓は、雑司ヶ谷霊園に建てられています。



晩年の吟子  
(瀬棚郷土資料館提供)



吟子の墓碑  
墓地に立てられた像

## 荻野吟子をめぐる女性たち



### 【母・嘉与】(1812-1885)

吟子の母。荻野綾三郎との間に二男五女をもうける。依瀬村(現熊谷市)では、賢夫人と評判であったという。

「周囲こそりて予が行為を非難する時も、涙をのんで心長くも予が成功を待てり」と吟子を応援し続けた。晩年片目を失明、もう片目も視力低下となり、吟子に介助されながら東京に治療に来たこともあった。



### 【奥原晴湖】(1837-1913)

天保8年、古河藩士池田政明の四女として生まれる。谷文晁の門人牧田水石に師事、関宿藩奥原家の養女となり江戸に出て、山内容堂・木戸孝允ら名士と交わりながら画名を高める。明治

24年(1891)、北埼玉郡成田村上川上(現熊谷市)に「繡水草堂」を建て隠棲、稲村貫一郎らの支援を受けながら、この地で没する。近代日本における女流南画家の代表者である。墓は熊谷市上之龍淵寺にある(県指定文化財)。



### 【松本荻江】(1845-1899)

弘化2年、秩父郡大宮町(現秩父市)生まれ。両宜塾や父万年が開いた止敬学舎でおしえる。両宜塾では、年下の吟子と義姉妹の契りを交わしたという。

明治8年(1875)女子高等師範学校教授となる。下田歌子の帝国婦人協会の設立や実践女学校の創立をたすけ、女子教育のため各地を遊説した。



### 【田中かく子】(1859-1953)

飯能の旅籠の家に生まれる。明治6年(1873)、井上頼国が父に依頼し、神習舎に入る。7歳年上の吟子と非常に親しくなり、ともに甲府女学塾の助教になる。吟子との交流は生涯続く

が、かく子が残した吟子からの手紙25通は貴重な史料となっている。飯能で教科書販売や印刷業を行い、大正元年(1912)からは、地方新聞『飯能時報』を発行した。



### 【竹ノ谷トミ】(1894-1978)

明治27年、志方之善の姉シメの子として生まれる。シメが次子を妊娠中に夫が死去。弟の之善が養子としてトミを引き取る。その後、吟子が亡くなるまで生活をともにしている。

熊谷農学校(現県立熊谷農業高校)の配属将校も務めた竹ノ谷貞助と結婚。熊谷に居を構え、吟子について話を残している。



### 【吉岡弥生】(1871-1959)

静岡県に生まれる。上京し、済生学舎に入学した。明治25年(1892)、内務省医術開業試験に合格し、日本で27人目の女医となる。東京女子医科大学の前身である東京女医学校(後、

東京女子医学専門学校)を創設、女性医師の養成や医学の教育・研究の振興に尽力した。吟子が東京で開業した医院にも取材で足を運び、後に吟子の顕彰活動を積極的に行った。



# 吟子顕彰の歴史

大正 4年(1915) 『秦村人物誌』に先頭で取り上げられる。  
 昭和11年(1936) 日本女医公許五十年記念大会  
 昭和42年(1967) 瀬棚町(現せたな町)に、顕彰碑建立  
 昭和43年(1968) 秦小学校に顕彰碑建立(後、生誕の地に移築)  
 昭和45年(1970) 渡辺淳一『花埋み』発表  
 昭和46年(1971) 生誕の地が、妻沼町(現熊谷市)指定文化財(史跡)となる。  
 平成10年(1998) 三田佳子主演の舞台『命燃えて』が脚光を浴びる。  
 平成18年(2006) 熊谷市立荻野吟子記念館開館  
 平成25年(2013) 荻野吟子没後100年記念事業

## さいたま輝き荻野吟子賞

埼玉県では、「荻野吟子」にちなみ、その不屈の精神を今に伝える先駆的な活動をしているなど、男女共同参画の推進に顕著な功績のあった個人や団体、事業所の方々に「さいたま輝き荻野吟子賞」を贈っています。

この表彰制度は、女性と男性が個性と能力を十分に発揮し、あらゆる分野に対等に参画することができる男女共同参画社会づくりを推進するとともに、埼玉の偉人である荻野吟子を顕彰するため、平成17年度から実施しています。



## 公益社団法人日本女医会 荻野吟子賞

公益社団法人日本女医会は、女性として初めて公に医師の資格を与えられた荻野吟子の偉業を称え、その名を永久に伝え、女性の地位向上を図ることを目的として、「日本女医会荻野吟子賞」を制定しています。毎年、独自の活躍をもって女性の地位向上に著しい貢献をした女性医師(原則として1名)に与えられています。

### ■荻野吟子を顕彰する団体を紹介します。

#### 荻野吟子史跡保存会

昭和46年11月3日に当時の妻沼町教育委員会から荻野吟子誕生之地が史跡として指定を受けました。その翌年、俵瀬地区の全戸が加入し、荻野吟子史跡保存会が結成されました。それから今日まで、地域の人々が協力し合い、生誕の地周辺の公園の整備や清掃、樹木草花の育成などを行い、吟子を偲びこの地を訪れる人々をお迎えしています。



#### 吟子の会

平成14年に結成された女性を中心とした吟子の顕彰会です。主に地域のイベントでの「吟子鍋」の提供や、雛祭りの3月3日が吟子の誕生日であることにちなんで、雛人形の提供を募り、妻沼の井田記念館での「吟子雛」の飾り付け展示などを行っています。これらを通じて、妻沼を訪れる多くの人々に対して吟子のPRを行っています。



#### 阿うんの会

妻沼聖天山本殿の国宝「歓喜院聖天堂」のガイドボランティアや「荻野吟子」についての顕彰活動、吟子記念館に訪れる方々への説明、妻沼地域の郷土遺産への案内も行っています。その他、熊谷市のイベントや聖天山の春秋の大祭などへの協力を始め、妻沼の郷土文化の啓発を担う中心的存在です。







# 熊谷市で吟子の歴史に触れる

## 熊谷市指定文化財記念物(史跡) 「荻野吟子生誕之地」

荻野吟子が生誕した地は、昭和46年11月3日に旧妻沼町の指定文化財記念物(史跡)に指定されました。現在、吟子像と顕彰碑が設置されており、整備された公園と共に、市民の憩いの場となっています。



## 熊谷市立荻野吟子記念館

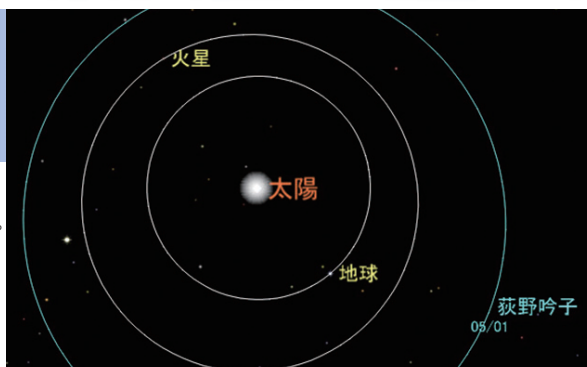
—吟子ゆかりの資料を展示—

**所在地** 熊谷市俵瀬581番地1  
**開館時間** 9時～17時  
**休館日** 月曜日  
(月曜が祝日の時は翌平日)  
年末年始  
**入館料** 無料  
**電話** 048-588-2044(妻沼中央公民館)



## 「荻野吟子」 という小惑星が あります。

火星と木星の間の小惑星帯を回る、直径10km程度の天体。熊谷市ゆかりの名の小惑星五つ(直実・熊谷・星川・荻野吟子・ムサシトミヨ)のうちの一つ。



**小惑星** Ginkogino(荻野吟子)  
**登録番号** 10526  
**発見日** 1990年10月19日  
**発見者** 早川修司氏・日置努氏  
**観測地** 東京都奥多摩町  
**名前の認定日** 2008年3月20日  
**公転周期** 3.4年  
**軌道長半径** 2.25天文単位  
資料提供：熊谷市プラネタリウム館

### 命名の経緯

平成19年秋、発見者の早川修司氏から「小惑星の命名申請を計画しているが、合併後の熊谷市のイメージアップに役立ててほしい。」と申し出がありました。そこで、プラネタリウム館で小惑星を勉強する市内の中学3年生から名前を募集し、命名されました。

## 吟子鍋レシピ 荻野吟子ゆかりの食材で作る郷土の味



吟子鍋

### 材料(4人分)

- 生鮭：切身160グラム
- じゃがいも：中2個150グラム
- 大和芋：中1本150グラム
- にんじん：中1本100グラム
- ほうれん草：3分の1束100グラム
- ごぼう：小1本100グラム
- ねぎ：1本
- 味噌：約50グラム
- だし汁：約6カップ
- 油：小さじ1から2

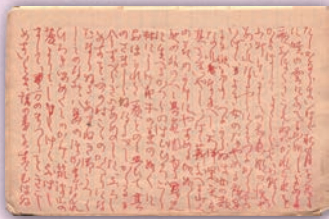
### 作り方

- 1 生鮭は、1切を4つ位に切って湯がいておく。また、ほうれん草は、ゆでて3センチの長さに切っておく。
- 2 ごぼうは、包丁の背で皮をこそげ取り、斜め切りにし、水に浸してアクを抜く。ねぎも斜め切りにしておく。
- 3 大和芋、にんじん、じゃがいもは、一口大の大きさに切る。
- 4 鍋に油を熱し、ごぼうに油がよくしみ込むまで炒める。
- 5 大和芋、にんじん、じゃがいもを炒め、用意しておいただし汁を入れて煮る。浮いてくるアクをすくい取る。
- 6 野菜が柔らかくなったなら、ねぎ・鮭を入れ、味噌を入れて、ひと煮立ちしたら火を止め、ゆでておいたほうれん草を混ぜる。

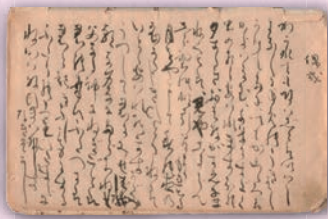


# 萩野吟子ゆかりの品

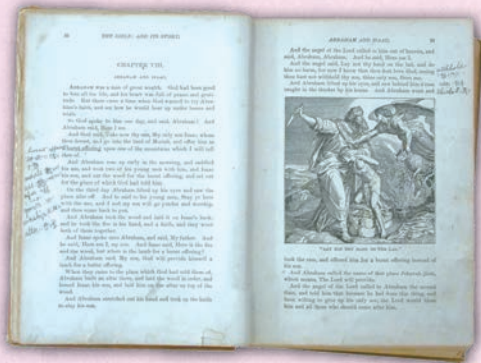
—せたな町瀬棚郷土館所蔵—



吟子の手帳



吟子のテーブルクロス



吟子が愛読した「聖書」



吟子のハンドバック

※手帳・テーブルクロス・聖書は、吟子愛用のもので、養女竹ノ谷トミ氏から寄贈された。  
ハンドバックは、吟子が国縫に在中に、療養のため預かっていた女兒に与えたもので、その子孫から寄贈された。

## 埼玉ゆかりの三偉人

萩野吟子は、埼玉県が選定した  
埼玉ゆかりの三偉人の一人です。

### 萩野吟子

たゆまぬ努力の結果、  
日本で初めて公許登録  
女医となった。

[熊谷市]

### 塙保己一

自らの障害を乗り越え、  
「群書類従」の編纂など  
を行った。

[本庄市]

### 渋沢栄一

企業の育成や社会事業  
に尽力し、近代日本経  
済の礎を築いた。

[深谷市]

### <主な参考文献>

萩野ぎん子	「本会設立の趣旨」(『婦人衛生会雑誌』1)	1888年
国民新聞	「婦人医者萩野吟氏の談話」(『国民新聞』48～50)	1890年
鈴木源子	「近代最初の女医が経歴」(『女学雑誌』354)	1893年
萩野吟子	「本邦女医の由来及其前途」(『女学雑誌』358～360)	1893年
日本女医会編	『日本女医会雑誌』1・2・30・69・72・76・112号	1913年～
秋山龍三	『日本女医史』日本女医史編纂委員会	1962年
萩野吟子女史顕彰碑建設期成会編	『萩野吟子』瀬棚町	1968年
渡辺淳一	『花埋み』河出書房	1970年
日下部朝一郎編著	『熊谷人物事典』国書刊行会	1982年
奈良原春作	『萩野吟子 日本の女医第一号』国書刊行会	1984年
奈良原春作	『萩野吟子抄』妻沼町	1985年
今金町役場改訂	『今金町史』上巻 ぎょうせい	1991年
木俣敏	『悠久なる利別の流れ』日本キリスト教団利別教会	1994年
石川博	『内藤満寿』(『街道の日本史23 甲斐と甲州道中』)	2000年
熊谷市立図書館	『熊谷ゆかりの女性先覚者たち』	2000年
白井暢明	『北海道開拓者精神とキリスト教』北海道大学出版	2004年
広瀬玲子	『萩野吟子—女医への道を切り拓いて』(『北の命を抱きしめて』)	2006年
津曲裕次	『シリーズ福祉に生きる51石井亮一』大空社	2008年
浅見徳男	『明治の女丈夫 田中かく子の生涯』オフィス恒春	2009年
熊谷市史編さん室	『日本最初の女医「萩野吟子」没後一〇〇年記念事業』(『熊谷市史研究』7)	2015年

資料提供・作成協力：今金町教育委員会・埼玉県教育委員会・せたな町教育委員会・滝乃川学園・深谷市

平成29年9月発行(改訂)：熊谷市教育委員会(妻沼中央公民館)

〒360-0202 熊谷市妻沼東1丁目1番地 電話 048-588-2044 FAX 048-589-0456 メール m-chuo-k@city.kumagaya.lg.jp

このパンフレットの内容は、「熊谷市デジタルミュージアム」<http://www.kumagaya-bunkazai.jp/museum/index.htm>でもご覧いただけます。

このパンフレットは、10,000部作成し、印刷・製本にかかる熊谷市の負担は、1部当たり19円です。